

奇跡の大腸ガン闘病記

手術も 抗ガン剤も 断わって

中野きく子

潮文社

手術も 抗ガン剤も 断わつて

奇跡の大腸ガン闘病記

野きく

中野きく子（なかの・きくこ）

昭和2年10月宮城県生まれ。

昭和26年4月、神奈川県警に勤める主人（豊治）と結婚し、以来横浜市在住。一男（本文中に出てくる息子。東北薬科大学薬学科卒業。5年間の病院勤務を経て、現在、東京都内の保健所に勤務）、一女（結婚、久喜市在住）の母。

手術も抗ガン剤も断わって

一九九二年九月五日発行

著 者 中 野 きく子

発行者 小 島 米 雄

発 行 所 株式 潮 文 社

〒一六二東京都新宿区市谷田町二二三
電話（〇三）三二六七―七二八（代表）

振替 東京 四一六九二〇七

印刷・風報社 製本・東京美術紙工

© Kikuko Nakano 1992

ISBN4-8063-1244-4 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

まえがき

今まで、心筋梗塞、ガン、など無縁と思って過してきた私の主人（六十八歳）が昨年二月、突然、心筋梗塞で入院し、その七日後、下血しましたが、後、大腸ガンにかかっていることがわかり、再入院しました。心筋梗塞の直後でもあり、手術をすすめる医師の強い勧告をあえて断わって、家に連れて帰って食事療法をし、みんなの手で思いっきり看病することにしたという息子のたつての願いと意見に従った、私達家族ぐるみの闘病記です。

息子は薬剤師ですが、薬の副作用やその他の医療の問題についての見聞や体験にもとづいた、息子なりの考えがあったのだと思います。主人を退院させ、家に連れ帰ったあと、私は朝晩血圧と脈拍を計り、大学ノートに細かい記録をとり、主人の体調や、主治医の話などをメモをしておきましたが、毎月の定期検診では医師も驚く程の回復ぶりを示し、私達はうれしくなってその都度、そんな先生方の表情まで細かく記入しております。

率直に申しまして、当初は手術をしなくては、そのうち便が口から出るようになると

までいわれたお医者さんや看護婦さんの強いすすめを拒んで、玄米と菜食を中心とした家庭療法（病院から出る多少の薬は飲みますが）で果してほんとに大丈夫かと、気がかりでしたが、今ではあの時、病院のすすめに従って手術し、副作用の多い抗ガン剤を使用していたらどうなったかと思うとつくづく自分達を選んだ道が正しかったことを痛感させられております。

主人は相当進行した大腸ガンだったと思いますが、今では元気に植木の手入れをしたり、家の周りを片づけたりと、一日中動き回っており、家族揃っての旅行の計画も立てております。

大学ノートにメモしたものをもとに主人の病気にかかわることはすべて、食事をはじめとするわが家での生活のこと、病院のこと、お医者さんのこと、薬の過剰投与による問題のことなど、赤裸々に綴らせていただきました。

特にガンの手術をすすめる医師とのやりとりの場面は、一言一句、忘れないうちに私とその都度、丹念にメモをしておいたものです。

私の周囲には私と同年代の方で胃がんの手術をして、二十年以上も元気に暮らしている方など朗報もいっぱいございます。

従って、医師のすすめる手術を断わり、病院から出される薬も極力控えて、自宅で玄米と菜食を中心とした療法こそ正しいなどというつもりは毛頭ございません。ケース・バイ・ケースかと思えます。が、今日、とかく軽視されがちなやり方の中にも、これだけ効果のある療法もあるのだということを一人でも多くの方々に知っていただきたいと思ひ、約一年余の記録を文章の才覚などまるでなく、毎日炊事洗濯に明け暮れる私が意を決してそのまま綴った駄文でございますが、難病に悩む方々にいささかでも参考にしていただくことができれば嬉しいと存じます。

本書の出版にあたっては、潮文社編集部の杉浦美智子さんにいろいろと貴重なアドバイスとご配慮をいただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

平成四年六月

中野きく子

手術も抗ガン剤も断わって——目次

まえがき	1
魔の二月二十八日	9
下血して	18
医師への不安	24
ガン宣告	37
家族会議で	45
食事療法始める	59
本人にガンを告知する	67
中野製薬(?)の効果	78
玄米菜食主義	88
歯医者騒動	100
ガンに効く薬	109

食の変化……………	117
病いの前ぶれ……………	130
はじめてのおみくじ……………	138
薬はこわい……………	149
一年たって……………	163
七〇パーセントの元氣……………	173
医師と製薬会社……………	179
玄米の力……………	190
元氣になった主人……………	201

魔の二月二十八日

それはある日、突然やってきました。忘れもしない、平成三年二月二十八日。

いつものように、朝七時頃、長男を勤めに送り出し、主人と二人でコタツに入って、いつもの通りひとしきりお茶飲みをし、主人は、

「今日は雨降りだからのんびりしようか」

といって、まだ敷いてある布団の中にもぐり込みました。私も、

「今日は洗濯もできないし、のんびりしましょうよ」

とそのままコタツに、ゴロンと横になりましたが、昨夕、ぐっすり眠ったせい、眠れないし、起きて電気をつけて、テレビでも見ましよう、と、ふと、隣の部屋の主人を見ると額の汗を拭きながら、半ば起き上がって胸をおさえておりました。びっくりした私は、「どうしたの?」と聞きますと、「胸が痛い」といいます。

「えっ、胸が痛い? それは放ってはおけないわよ。救急車を呼ぶから早く支度をして

……」といいますと、「そんなの呼ぶことないよ」と叱りつけるような口調でいいいますので、一度いったら聞かない主人の性格を知っている私は、はやる心をおさえ、駅までタクシーを拾いに走りました。女の足で歩いて十分足らずの道を、タクシーが来ないかと後をふり向き、ふり向き、思うように動かない足どりで、やっと駅前のタクシー乗り場にたどり着き、「ホッ」としたのも束の間、いつもは次々入ってくるタクシーが三人の先客もいるのに、思い出したようにしか入って来ず、イライラさせられ、はやる気持ちをおさえるのに懸命でした。

車の中で聞いたタクシーの運転手さんの話では、丁度今頃の時間帯は交替時間で洗車などで時間をとり、タクシーが少ないということでした。その間にも「主人はどうしているだろう」と思って息せき切って玄関の戸を開けますと、主人は玄関に仁王立ちになり、それでも私が大急ぎでダンスから出していった下着と着物を着ておりました。

「なんだおそい、何やってんだ」と血の氣のない顔で怒っております。頑固なところがあるものの、私に対して、こんな言葉を浴びせたのは初めてです。

「とにかく、早く早く」とタクシーに乗せ、脈をとってみると、「とん、とん、とん、とん」早鐘を打つようでした。

幸い、運転手さんはとても親切でさくな方でした。「ゆっくり運転して行きましょー」と車を発進させ、いろいろ話しかけて下さいました。なんでも若い時に医者になり損なったとかで医学知識を持ち合せていらっしやるとの事でした。私は、心筋梗塞の何たるかも知らないまま、「心筋梗塞じゃないかしらねえ」といいますと、「そうじゃないと思いますよ。僕は動脈硬化だと思います。こういう時は、深呼吸をして、手のひらをパッ、パッと開いたり閉じたりすると血液の循環がよくなり、楽になりますから。これからは豚肉は一番悪いですから、一切食べない方がいいですよ。ニラは一日三回、大いに食べなさい。とにかくニラが一番いいです」と、ニラを強調されました。主人の方を見ると相変わらず片方の手で胸をおさえ、片方の手は思い出したようにパッ、パッとやっております。

そうこうしているうちに、途中大した混雑もなく病院の玄関に到着しました。急いで受付へ行き、「胸が苦しいと言いますから急患でお願いします」といいますと、手際よくカルテを作って下さり、内科の窓口へ持っていきました。そこでも、「胸が苦しいと言いますから、急患でお願いします」とカルテを出しますと、看護婦さんが、「大丈夫ですか」といって主人をさっと車椅子に乘せて、さっさと心電図室に連れて行ってくれ

ました。

私は一人でハンドバッグと二本の傘を持ち、心電図室前で「一週間位、検査のため入院させられるかな」と思いながら待っていますと、心電図室のドアが開き、主人と同年配と思われる白衣のお医者さんが出てこられ、

「御家族の方ですか？ 心臓が悪いので入院してもらいますから」といわれました。

「あの一、子供達に連絡しなくてもよろしいでしょうか？」と聞きますと、「教えて下さい」といってさっさと診察室の方へ戻っていかれました。

私は心の中で、「ええっ」と叫びました。その時の私は一瞬ハンマーでなぐられたようなショックで、胸は早鐘を打ち、足はガクガク地につかず、様々な思いが脳裏を駆けめぐりました。あゝあ軍隊でシベリヤの抑留生活を終え、警察官として三十四年間。定年後、横須賀市の嘱託として五年間。病気一つせず家族のために頑張ってきた主人がもうこれで……ダメになってしまふのだろうか。まだ息子も結婚はおろか、ガールフレンドもないというのに……。何と人間の命ははかないものか。もろいものか……。私の頭の中は真白になっていました。

とにかく子供達に連絡をと、廊下にいっぱいになっている患者さんの間を縫うように

しながら、公衆電話にとびつき、ふるえる手で何度も間違えながらダイヤルをまわしながらも、主人はどうしているだろう、と心ははやりました。

六階の集中治療室の廊下にたどり着きますと、廊下から主人が治療していただいている様子がよく見えます。体格の良い若い主治医のH先生と三人の看護婦さんが一生懸命、モニターを見ながら本当に真剣に治療して下さっていました。もう点滴も始まり、導尿もされて尿も結構たまったようです。私は尿を見て素人ながら「あれだけ出ていれば助かるんじゃないかな」とそんな思いがよぎりました。

間もなく息子がかけつけ、一目で点滴の種類がわかったらしく、

「お母さん、あの点滴は心筋梗塞には一番よいから、この治療法が最新の治療で、後遺症も出ないし、絶対大丈夫だから心配しないで」といいます。

私はうわの空で、「あ、そう、でも大丈夫かな、もし半身不随にでもなったらかわいそうだし」「大丈夫、ぜったい大丈夫だから余計な取越し苦労はすることないから……」と二人でボソボソ話しておりました。

その時です。医療チームがざわめき立ちました。私は思わず主人の枕元に近寄ろうとしましたが、H先生にさえぎられました。

モニターを見ながら一人の看護婦が、「血圧四五」というと、もう一人の看護婦が、ベッドのハンドルを急いで回し、頭の方を低くしておりました。H先生は、「下へ運ぼう、下へ運ぼう」と言っていました。看護婦達は口々に、「先生、無理ですよ、こんな状態で動かすのは無理です」と押し問答をしておりました。やがて、H先生は、私達の前に来て説明を始めました。

「御主人は心筋梗塞です。発症したばかりですが、この病気は一週間が急性期ですので出来るだけの事はやりますが、今血圧が下がってきましたので、このままでは危険ですので、下の階に運び、大腿部から細い管を入れ、心臓に電気ショックを与えて、心臓が止まらないようにしますから」といいます。

息子はそのやり方は納得できないようで、H先生に聞き返しました。

「心筋梗塞というのは、冠動脈に血栓が詰まることによって起るわけですよね」

「そうです」

「それで今、血栓を溶かすためにヘパリン（血液抗凝固薬）の点滴をしているわけですね」

「そうです」